

〔研究発表〕

①劉炫の生涯とその学問

京都大学大学院 田尻 健太

本発表は、北齊から隋にかけて活躍し、『孝經述義』などの著作を著した劉炫の生涯とその学術について、報告するものである。

劉炫は南北朝時代の經学の一形態である「義疏」の学者であり、その学説は『五經正義』に取り込まれ、後世に大きな影響を与えた。劉炫に関する専論としては、すでに喬秀岩『義疏学衰亡史論』などがあり、その学問の特徴はある程度解明されている。しかし、劉炫がそうした学問を持ちえた社会的背景については、これまで十全な議論がなされてきたとは言い難い。本発表では、劉炫の生涯やその社会的背景と、劉炫の学問の内容に深い関係が認められることを明らかにし、その学問の捉え方に再考を促すものである。

劉炫は、その生涯において、北齊の文林館設立による『修文典御覽』の編纂、隋の牛弘による蒐書事業などと関わりを持ち、また周囲の学者とも積極的に交流していた。これらの事象は、特に劉炫の『尚書』と『孝經』の学において如実に反映されている。発表では、社会的な事象と劉炫の經書研究がどのように結びついているのか、具体例を挙げて詳述する。

次に、これまでに劉炫の学説の特徴として指摘されてきた、南朝の学者を批判する傾向について、改めて議論する。従来の研究は、「劉炫＝北朝系の学者」と措定し、南朝への対抗意識から南学を批判するのだとしてきたが、これだけでは捉えきれない面があると発表者は考えている。本発表では、新たな材料として『孝經述義』と敦煌写本『孝經鄭義疏』（仮称）の比較などを行い、劉炫は南学の批判を盛んに行う反面、北学を顕彰することはほとんどないことから、北学の学問的蓄積をそれほど継承しているわけではないのではないか、と指摘する。

最後に、劉炫の学問の背景と、実際に見受けられる南学・北学への学問的態度を踏まえ、特に南学の位置づけとその相対化という観点から再考し、劉炫の学問についての新たな見通しを示す。

②呉均の詩と『玉臺新詠』

関西大学大学院 呉 雨清

南朝梁の呉均(469～520)については、『梁書』文學傳に「家世寒賤」とあり、終生低い官位に止まった。その一方、『玉臺新詠』(趙本)では詩二十六首が採録され、その数は梁武帝蕭衍、簡文帝蕭綱、沈約に次いで四番目の多さとなっている。また、『梁書』に「均の文體、清拔にして古氣有り、事を好む者、或いは之に敷ひ、謂ひて『呉均體』と爲す」とあり、當時の文學的影響力の大きさがわかる。つまり、呉均は『玉臺新詠』の代表的詩人だと言えるが、中国でも日本でも、呉均についての専論は極めて少ない。

なぜ呉均の詩が『玉臺新詠』にこれほど多く採られるのか、この理由を探れば、『玉臺新詠』の選詩基準の一端を窺い知ることができるだろう。

報告者は、以下に挙げる点こそ呉均の詩が『玉臺新詠』に多く採られる理由だと考える。

第一に、当時における「呉均體」の影響力である。ただ、これまでの研究では「呉均體」がいったいどのような特徴を持つものなのか、必ずしも明らかにされたとは言えない。報告者は先行研究を参考にしながら、「呉均體」の重要な特徴は「聯緜字」の使用だと考え、それはまた『玉臺新詠』の編者に認められた主要な理由だとの仮説を提出する。

第二に、呉均が五言八句体の「新體詩」や樂府詩を多作したことが挙げられる。それは、当時の文壇の重要な潮流の一つであった。呉均は生涯を通して、「新體詩」、および樂府詩の創作に力を注いだ。これらの作品の分析を通じて、蕭綱の文學思想および詩歌創作、さらには、徐陵「『玉臺新詠』序」に示される、新しい文學への姿勢との関連性を探る。

第三に、呉均が梁武帝蕭衍の文學集團に屬し、沈約の推奨も受けたことである。また、蕭子顯との関係も重要である。このような呉均の経歴と處世が、『玉臺新詠』への詩の選録にどのように影響したのか、についても事実関係を改めて整理したい。

③南朝における蔡氏

愛知県立大学 洲脇 武志

中国前近代の学問は官製の「太学」を始め、様々な場所において継承・発展していったが、六朝時代では主に「家族（門閥）」がその中心となり、「家学」と呼ばれて継承・発展していた。この六朝時代の家学については、既に吉川忠夫氏を始めとする先学によって研究され、当時の家学及び学問の特徴について明らかにされている。先行研究では、順陽の范氏（范寧・范曄）、河東の裴氏（裴松之・裴駟・裴子野）、呉興の姚氏（姚察・姚思廉）・琅邪の顔氏（顔之推・顔遊秦・顔師古）などが取り上げられているが、当然「家学」を持つ一族は他にも多数存在する。

本発表で取り上げる陳留（済陽）の蔡氏は、後漢末の大学者として知られる蔡邕を始めとして、その一族から数多くの人材を輩出し、後漢末から初唐にかけて活躍した一族である。この蔡氏は「謨 博学にして、礼儀宗廟制度に於いて議定する所多し（謨博学、於礼儀宗廟制度多所議定）」（『晋書』蔡謨伝）、「蔡氏は故より是れ礼度の門なり（蔡氏故是礼度之門）」（『南齊書』蔡約伝）と評されるように、礼学によって知られた一族であった。また、「蔡氏は故より是れ礼度の門なり」という発言から、蔡氏は礼学を家学としていたこと、またそれが当時の人々に認知されていたことが確認できる。しかし、この蔡氏の礼学や家学に関してはこれまで十分な研究がなされていなかった。そこで本発表では、蔡氏が特に活躍した後漢末から南齊までにおける（1）「蔡氏一族の事跡とその学問」を整理し、ついで（2）「蔡氏の学問と礼制度制定との関係」と（3）「蔡氏の学問の影響」を確認することで蔡氏の学問の概要を明らかにし、蔡氏の家学、ひいては当時の学問の有り様の一端を明らかにしていきたい。

④鮑照詩の自然描写に関する考察

フェリス女学院大学 宋 晗

六朝詩の自然描写が、謝靈運の山水詩の登場によって画期を迎え、謝靈運以降の世代の詩人に洗練されていったことは文学史の常識である。本発表では、謝靈運の詩が一世を風靡するようになってか

ら、詩人として世に出た鮑照の自然描写を中心に、謝靈運没後の二、三十年間における詩の自然描写の発達について考えてみたい。

自然描写を伴う鮑照詩の全体的な特徴は、向嶋成美「鮑照山水詩考」（2001）に概括されている。向嶋氏によれば鮑照詩には、謝靈運詩をモチーフにしつつ修辞性に傾斜したもの（「登廬山」など）と、謝靈運的な雰囲気希薄で、修辞よりも全体の構成に重点が置かれたもの（「登黃鶴磯」など）があり、謝靈運を継承するものだけでなく、謝靈運から区分されるスタイルも認められると言う。

本発表は向嶋氏の驥尾に付し、鮑照固有の叙景のスタイルを示す端的な事例として「日落望江贈荀丞」を取り上げ、その空間表現について考察する。同作は、鮑照が臨川王劉義慶に従って広陵に在任した時の旅愁を知人に訴えたものであるが、作中の長江の広大無辺なイメージには、作者と作者の帰りたい場所との隔絶感が表れている。隔絶感を象徴する空間の像は従来の旅の詩に先例を見るとはいえ、それが鮑照詩において、際限を視認できない無限的なものとして表現されているのに注目したい。鮑照詩の空間表現は、空間を凝望し、その無限性を知覚するという精神の動態が織りこまれている点で目新しいのである。

以上をふまえ、「日落望江贈荀丞」の空間表現について、次の二点を検討する。第一に、空間を表す鮑照詩の技法が先例に基づきながらも、より錬磨されていること。第二に、かかる空間表現が同時代に独自性を持つことを、主に謝靈運詩との対比を通じて明らかにする。

〔講演〕

表現する阮籍——六篇の「賦」の基点から考える

青山学院大学名誉教授 大上 正美

以下の三点をめぐって考えたいとおもいます。

- (1) 阮籍の「賦」作品について——寓話と仮構
- (2) 「至慎の生」⇒「東平賦」→「清思賦」⇒「大人先生伝」
- (3) 嘉平六年正元元年（二五四）の阮籍——「首陽山賦」と「詠懷其十六」